

日本におけるブックスタートに関する一考察
～現状から見えてくる課題への提言～

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター

ブックスタートは、地域の保健センター等で行われる 0 歳児健診の際に、すべての赤ちゃんとその保護者に対して、ブックスタートに込められたメッセージを伝えながら絵本を手渡す活動である。識字率の低下と活字離れが大きな社会問題となっている英国において 1992 年に誕生したもので、日本へ紹介されたのは 2000 年の「子ども読書年」である。杉並区で試験的に実施された後に全国的に急速な広がりを見せ、2003 年 12 月現在では全国 537 自治体の実施するまでに至っている。メッセージと絵本を手渡すというシンプルな形式であることと、少子化問題で課題となっている育児支援の一端を担うものであることに着目し、ブックスタートを導入する自治体が多くなっている。

しかし現在、急速な広がりによって多くの問題が浮き上がっている。その多くは、各自治体が、地域で抱えている問題や課題、ブックスタート導入後の展開等について各自で明確なビジョンを持たないままに、活動だけを取り入れたことに起因するものが多い。特に、関係各機関の連携や絵本配布後のフォローアップ体制、活動を支える情報網の確立等については多くの自治体が抱える共通の課題であり、これらの課題に対する何らかの提言をする必要があると思われる。

そこで本研究では、絵本を介したコミュニケーションを育児の一方法として紹介するとともに、ブックスタートの現状を把握し、問題点や今後の展開について提示することで、現在ブックスタート事業を実施している自治体の問題解決となる糸口となることや、今後実施を予定している自治体の指針となることと目的としたいと考えている。

まず、ブックスタート発祥の地英国については、英国ブックスタート推進団体であるブックトラスト(Booktrust)、英国ブックスタートホームページ、ブックスタート支援センターから得られた情報を整理して記述する。また、日本については、先に整理した英国との比較によって日本におけるブックスタート課題について考察する。

多民族国家である英国では、地域の住民層の差異によってブックスタートの展開が異なっている。健診受診率を向上させることに重点を置いた展開であったり、親子のコミュニケーションを支えることに重点を置いた展開であったり、地域住民のニーズに応じた形で、独自のブックスタートが確立されている。また、活動を支える様々な体制や地域住民、大手企業からの援助も、英国のブックスタートにおいては欠かせない重要な位置を占めている。さらに、ブックスタートによって絵本と出会った親子のためのフォローアップ体制についても看過できない。子どもたちが絵本の作者等と出会えるオーサービジット(AuthorVisit)や図書館活動の充実等、日本が参考にすべき多くの活動が展開されている。英国と日本とでは社会的背景や文化等が異なり、当然ブックスタートもそれぞれに異なった形で展開していくであろう。しかし、英国社会のもつ「子どもの育つ環境に対する大人の深い配慮」のあり方を日本のブックスタートにも取り入れていく必要があるのではない

かと考えられる。

日本におけるブックスタートについては、主にブックスタート支援センターから得た情報を整理すると共に、ブックスタートを実施しているいくつかの自治体を訪問して現状を把握した。多くの自治体において課題となっているのは関係各機関の連携の問題である。今後市町村合併等により大規模な自治体においてブックスタートが導入されることが予想されるため、各自治体が連携について再考察する必要があると考えられる。また、各自治体はブックスタートの実施方法について、独自の展開を確立する必要もあるといえる。というのも、全国に画一的な方法があるわけではなく、むしろ画一的な方法では真に地域に根ざした活動に展開していかないからである。地域に根ざした活動となるためには、地域の子育て支援、あるいは読書環境の整備に対してどのような支援が求められているのかについて把握する必要がある。地域が抱える育児の現状がどのようなものであり、ブックスタートを通してどのような育児支援をしたいのか、そしてその支援を今後どのように展開していくのかという一連の流れを考慮せずしてブックスタートを進めていくことはできないからである。さらに、絵本を手渡した後のフォローアップ体制の確立も重要な位置を占めている。なぜなら、ブックスタートはあくまでも「絵本と出会うきっかけ」を手渡すことを目的にした活動であり、そのきっかけを受け止めた親子のために次に進む場を作り出さなければ、ブックスタートの存在意義がなくなるからである。

日本においてブックスタートを展開していくためには、英国の制度を参照し日本でも取り入れていくことと日本独自の方法を見出すことの両側面が必要である。そのためにも、情報を整理し現状を把握することは重要になると思われる。そこに本研究の意義があると考えている。ブックスタートの活動自体がまだ始まったばかりの活動であり、自治体がその方向性を決めかねていることは非難できないことであろう。だが、ブックスタートが実際の活動として既に動き出している現在、それぞれの自治体が独自の方向性を見出すことが早急に求められるのではないだろうか。